

公開講演会発表要旨

弥生時代青銅器の役割 弥生社会のなかで青銅器が果たした役割に関する問題点のうち以下について、諸学説を整理紹介し、若干の私見を述べた。①青銅武器形品の実戦での使用の有無。②武器形青銅器の祭器化の原因。③武器形祭器の長大化の原因。④青銅祭器による集団祭祀の時間的変化の本質は強化か形骸化か。⑤その祭祀の終焉、祭器の消滅の原因。⑥青銅祭器はいかなる集団祭祀に用いられたのか。⑦青銅祭器が埋納された理由。⑧青銅祭器の分布圏の意味付け。⑨東日本に大型青銅器が及ばなかった理由。⑩弥生時代青銅器を東アジア各地のものと比較した場合の特質。(岩永省三)

奈良時代の鏡 平城京出土の唐式鏡 近年、平城京二条大路北側溝から瑞雲双鸞八花鏡が出土した。この鏡を手がかりに、平城京に残された唐式鏡を階層性という視点から3大別し、型式と機能について論じた。大形鏡は、正倉院鏡に代表される1尺鏡で、祭祀性が強く、鋳上がり・仕上げの良好な上質鏡である。類例としては、香取・春日・大山祇3社の海獣葡萄鏡などがある。中形鏡は、二条大路北側溝出土鏡を代表とする。踏み返し鋳造を特徴とし、踏み返しによる縮小化や、范傷の観察によって、鋳造順位や系列を推定できる。小形鏡は、直径10cm以下の鏡で、海獣葡萄鏡の踏み返し鏡が大多数を占める。ひんばんに踏み返し鋳造を繰り返すことによって、縮小化が著しく、文様も不鮮明となっている。祭祀に多数を一括して使用することを前提としてつくられた鏡である。(杉山 洋)

飛鳥地域の調査から 1990年度、飛鳥藤原宮跡発掘調査部は、飛鳥地域で山田寺、坂田寺、石神遺跡、山田道などの調査を行なった。特に坂田寺に焦点を絞り、調査の過程を報告した。坂田寺は1972年度以降、6回調査を行い、第1・2次調査では7世紀前半以降の池や溝・井戸、第3次調査では仏堂の一部と須弥壇・鎮壇具、第4次調査では石組溝、第5次調査では仏堂の東方で鎮壇具、そして今年度の調査で、第3次調査でみつかった仏堂に加え、回廊を検出した。建築部材の遺存状態も良好であった。仏堂・回廊は桧皮葺。また仏堂の廃絶時の状況は、10世紀後半以前に東南方からの土砂で壁の根元まで埋まり、次第に立ち腐れの状況となり壁が倒れ、10世紀後半には土砂の上面で仏像・部材などを焼却したらしい。(深沢芳樹)

二条大路で見つかった木簡—長屋王邸のその後— 長屋王邸の北を走る二条大路の南北両肩に掘られた東西溝から、大量の木簡が出土した。木簡の年紀は天平7、8年のものが多く、同12年の恭仁京遷都前後に廃棄されたものと見られる。そして出土地点と記載内容から、長屋王邸跡に置かれた施設から捨てられた一群と、その北の左京二条二坊五坪から廃棄されたものと大きく二分される。前者は①贄を含め、税の荷札木簡が多い、②宮内省被管官司関係木簡を含む等の特徴から、天皇・宮内省等と関係深い施設と見られる。一方後者は、①兵部卿宅充ての文書木簡がある、②資人に関わる木簡が多い等の特徴を持ち、兵部卿藤原麻呂の邸宅と判断される。また前者中に見える意保御田は、倭屯田の後身の令制官田である可能性がある。(館野和己)